

南スラウェシにおける木造船利用の現状

－漁船と観光船を中心に－

The Current Situation of the Use of Wooden Boats for Fishery and Tourism in South Sulawesi

明星 つきこ (金沢大学大学院)

MYOJO Tsukiko (Kanazawa University)

歴史的に海上交易によって発展してきた海域東南アジアにおいて、海は主要な舞台であり、また海を渡る船も人びとの暮らしに不可欠な存在である。インドネシア南スラウェシを拠点とするbugis・マカッサル人は、実際には農業や都市での商売など直接海に関わらない人口が多いものの、港市国家として繁栄した歴史的背景や今日まで続く海域ネットワークを駆使した交易や漁、造船や操船などの海にかかわる経済活動から、一般的にインドネシアを代表する海洋民として知られている (Pelras 1996)。彼らが造り、使い続けてきた木造船は、とりわけ伝統的帆船であるピニシ船が無形文化遺産に登録されたことを契機に、今や単なる経済活動の手段ではなく南スラウェシ社会、ひいては海洋国家インドネシアとしての象徴となっている。

本研究は南スラウェシにおいて今日の木造船製造とその利用の実態を調査し、当該地域において木造船産業が維持される社会的背景を明らかにすることを目的としている。発表者はこれまで木造船産業の一大拠点となっている南スラウェシ州ブルクンバ県タナベル地区において、聞き取りや参与観察を中心とした製造状況および利用状況に関するフィールドワーク調査を実施しており、本発表では特に利用状況について報告する。

これまでの調査より、タナベルで製造される木造船のおよそ半分が主に地元で利用される漁船であり、もう半分が州外の観光地で使われるレジャー船であることが明らかとなった。漁船はブルクンバ周辺海域における巻き網漁や敷き網漁などをはじめ、水産物の運搬や養殖など様々な場面で用途に応じた規模の木造船が用いられている。一方、観光船はラブアンバジョやラジャンパット周辺でのクルージングに利用され、ダイビングや宿泊も可能な大型のピニシ型観光船が多く用いられている。このことから今日の木造船需要は、従来の経済活動に加えて、近年の観光資源化に伴い生じており、またこうした需要に柔軟に対応する船大工らによって木造船産業が維持されていることが明らかとなった。

【参考文献】 Pelras, Christian (1996) *The Bugis*, Backwell Publishing.